
最強って何？

若月 椎名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強って何？

【Nコード】

N0029J

【作者名】

若月 椎名

【あらすじ】

妹と二人で平和に暮らしていた俺。しかしある日、家に強盗が押し掛けてきて妹は死んだ。そして俺は気づけば神の前に立っていた。神は妹を生き返らせてくれるといった。そして妹を生き返らせるために少年は神が出した条件を飲むことにした……。あつなみに作者は極度のロリコンです。それでもいいかたはぜひお立ち寄りください。

く神との出会い（前書き）

なにもおもいつかない・・・OTL

みなさん知ってのとおりこの小説の作者は馬鹿です。（しまったこっちやないかー

作者はそれを自負した上で書いております。なので本文中に変なところがあったら、『うわーこんなところミスってるよ。作者ブギヤー』などと罵って貰ってかまいません。感想待ってます。^^

く神との出会い

えつと・・・・・・・・ここ何処？

俺は目が覚めたら知らない場所に居た。

普通の人間なら朝起きて違う場所に居たら驚くだろうが、俺こと御^{みじ}条^{よう}智也^{ともや}に至ってはその限りではない。

実は昨日の夜、俺は自殺するために大量の睡眠薬を飲んだ。

そして目が覚めたら。ここに居た。

見渡す限り平原の中で俺は先程から胸に引っかかっていた疑問を口にする。

「俺は・・・・・・・・死んだのか？」

丁度その時だった。いきなり智也の体が発光した。

「なっ！！！！何が起きてるんだ！？」

そして次の瞬間。

先程居た平原とはまた別のところに智也は立っていた。

そこはまるでドラゴンホールに出てくる神の神殿的なものがあった。

「ここは・・・・・・・・何処だ？」

再び同じ疑問が浮かんでくる。

一体何が起こっている。

俺は冷静に考える。そして整理してみた。

昨日、学校が終わりそのまま家に帰宅した俺。

そして家の玄関を開けた時、俺と二人暮らした妹が黒いマスクで顔を覆っている強盗らしき人物に包丁で刺され死んでいた。そう
だ・・・俺の妹は・・・

「うああああああああああああああああ・・・」

そうだ完全に思い出したぞ。昨日強盗が俺の妹を殺した所を見た俺は、怒りのあまり玄関にあつた花瓶を手にとつて強盗にたたきつけたんだ。そして妹を殺した強盗を俺が殺した・・・

そしてその夜、俺は・・・妹を失つた虚しさから逃れるために死んだんだ。

そう・・・確かに死んだはずだ。あれだけの睡眠薬を飲んだんだ。死んでないほうがおかしい。

そして俺は現在、この神殿的なところにいる。

俺は無力だ・・・妹も守れなかった。不意に涙が頬を伝う。

すると後ろのほうから声が聞こえてきた。

「おい少年。何をしておる。はやくこつちにこんか。」

・・・誰？

とりあえず呼ばれたほうに行つてみた。

そこには白髪の爺さんがいた。頭の上に変な輪が浮いている。

もしや

と思ったが一応聞いてみる。

「あの・・・どちら様でしょうか？」

「ワシか？わしや神じゃよ。」

やっぱりか~~~~い。俺の突っ込みは天高くまで響いた。

「それでここは何処ですか？もしかして天国だったりするんですか？」

「いやここは天国ではない。そもそも君達人間の考えている天国や地獄といった物は存在しないのじゃよ。死んだ者の魂は一度神の元に集められる。そしてその後、過去の記憶や、性格をリセットして新たな肉体の誕生と共に送り出すのじゃよ。」

なんか物凄いこと言ってる気がする。

しかし俺はここで一つの疑問を浮かべる。

この神殿には神様とやらのほかには俺しかない。

普通ならもつと大勢いてもおかしくないはずだ。

それに・・・死んだ人が神の元に集まるって事は俺の妹もいるはずだ。

俺は口を開く。

「何で俺しかないんですか？」

神はものすごい笑顔で良くぞ聞いてくれたって感じで話し出す。

「実はのゝ久々に人間界を覗いていたら悪の気配がしての、観てみるとお主の妹が死んでいて。お主が妹を殺した犯人を殺した所を見かけての、お主がその後どうするか興味が湧いた所で、いきなり自殺しよるから、驚いたぞい」

神はあの事件のことを語りだした。しかしあの事件と俺がここにいることの関係性が見当たらない俺はもつと直接的に聞いてみた。

「えゝゝと、それで俺に一体なんの用ですか？」

「お主の妹を生き返らせてやる」

「えっ・・・」

神とやらが言った言葉に俺は正直、何言ってるんだろうこいつと思つた。

しかしこの自称神な人が言ってる言葉は雰囲気でなんとなく本気だ^{まじ}と俺は感じ取つた。

「その話本当ですか？」

神に飛びかかる俺。

神は本当じゃと言いながら、そのかわりに条件があると言つて来た。

「条件つて何ですか？」

ものすごくいやな予感がした。神は先ほど見せた笑顔よりも更に笑顔で妹を蘇らせる変わりの条件とやらを話し出した。

「実はのゝこう見えてもワシはもう8千万年もこの神殿に住んでいての、退屈で退屈で退屈で退屈でのゝいつ観ても世界は特に楽しいこともなく時が過ぎてゆくんじゃない」

何処か遠くを見つめながら話す神は、とても寂しそうだ。神の綺麗な黄金の瞳はぼんやりとしている。きっと昔、そう神が生まれた頃くらいはまだまだ色あせない輝きを放っていたであろう瞳を見て俺は、なにか止めようのない憤りを感じた。

そして神は一呼吸置くとまた語りだした。

「そんな長い年月を生きただからこそ気づいたことは多々ある。人はみな強欲なものじゃ。必ず心のどこかに悪が潜んでおる。そして何時の世も戦争や貧困であえぐ人々の姿は存在する。わしもわしなりに全世界を見渡して、できる限りのことをしてきた。しかしやはり、わしのようなひとならざる者が人間達などに手を貸してしまつたら世界の均衡は崩れいづれ全世界がほろびるじゃろう。そこでわしは考えた。悪の心を持たぬ人間が現れたときその者に世界を導かせようとな」

「もしかして……悪の心を持たない人間って……俺のことですか？」

「そうじゃお主は生まれたときから選ばれてたんじゃよ。お主は人間であり神の子であるのじゃ」

そう言つた神は俺に向かってどうする？という視線を投げかけてくる。

もちろん妹が助かるなら俺は何だってするさ。だけど……俺は迷つた。

それはもちろん妹が生き返ることを前提にしての迷いだつた。そして神に俺は告げる。

「わかりました。神の意思に従います。その代わり一つだけ願いを聞いてもらえませんか？」

「いいじやろう」

神は快く了承してくれた。

俺は俺の思いを告げる

「妹の・・・妹の俺に関する記憶を全て消してください。お願いします。」

神は智也が言った願いがあまりにも想像していたものと違い面を食らった様子。

「本当にいいのか？」

そう問いかけてくる神に智也は青く透き通った何の迷いもない瞳で

「はい」と答えた。

神は

「最近の人間の考えとることはわからんな」

とため息混じりに呟いて手に持っていた杖の先を地面にコツコツと3回ほど当てた。

すると神の懷から光の玉が飛び出してきて、はるかかなたに飛んでいった。

「よし。これで妹さんは生き返ったぞい」

そう話す神を横目に光の玉が飛んでいったほうを見つめる智也はどこか寂しげだった・・・

く神との出会いく（後書き）

なんかおもいついたんで書いてみました。もしよろしかったら感想など待ってます。

こんな駄作笑ってもらって結構なんで、駄目なところなどの指摘お願いします。

くえっ！！！！それってチートすぎない？」

「さてと・・・お主の妹も生き返らせたいの、そろそろお主にして貰うことを話そうと思つとるんじゃが・・・わしの話を聞かんかい！！！」

後頭部に激痛が走る。どうやら神にツツコミを入れられたみたいだ。

「イタタタタ。なにするんですかつ！！！」
神に抗議する。

神はそんな俺を見て一笑すると、先程とは違う真剣な眼差しで語りだした。

「お主には、ある世界を救つて貰いたい。」

「はい？」

キョトンとしている智也に神は、さらに細かい話をしだした。

「先程も話した通り、お主には悪の心が見受けられないのだ。そもそもなぜお主がここにいるかと言うとわしはこの宮殿にある仕掛けを施していたのじゃ。それは『誰かのために強くなれる心』『誰にでも平等に接することができる心』『己の命を覚悟のために捨てられる心』を持った人間が死んだ時、自動的にこの宮殿に送られると言うものじゃ。そして今まさにここにこうしてお主が居ると言う事は、お主は確かにこれらの資質を持っているということになる。だ

から、お主にはわしの代わりとなつて世界を導いてほしいんじゃ。わかつたか？」

なるほど・・・しかし俺には本当に悪の心が無いのだろうか。

俺は強盗といえど一人の人間を殺めている・・・それは悪・・・しいて言えば罪ではないのだろうか？

俯いている俺に神は何かを察したのだろうか、先程の話にこう付け加えた。

「お主は確かに一人の罪人を殺めた。しかしお主は自分の私利私欲のために殺めたのか。それは否。お主は殺された妹の仇討ちとして殺めたのじゃ。殺人が罪では無いという訳ではない。しかしお主が殺めたのは妹のためにした事なんじゃよ。すこし度が過ぎた見たいじゃが、お主はそんな自分を許せずに自殺しようとしたことも事実。それは誰かを思う気持ちが無ければできないことなんじゃよ。そんなお主だからこそ、わしの仕掛けが反応したんじゃよ。」

神はぼんやりとした黄金の瞳で俺を見つめ、最初にあつた時と同じ笑顔を浮かべた。

俺は神が発した言葉を聞いて、胸の中に溜まっていた重みが軽くなつた事に気づいた。

そして俺は具体的に何をすればいいかを聞いた。

神は話が遅くなつたと言つて、「とりあえず、お主に力を与える。どんな力がほしい？好きな願いを言ってみる。10個までならいいぞ。」と言ひ出した。

普通、願いを叶えるとか言つたら1つとか3つまでとかの設定があ

と思うんだが・・・今、目の前にいる神様は10個までいいとかほざいちゃってるんですけど。いくらなんでもそれはチートすぎるだろ。と心の中で突っ込むが、まあ10個も叶えてくれるっていつてるんだから、一応いろいろ言ってみる。

「それじゃあ・・・時間を操る力と小指で10t位の岩を持ち上げれるほどの怪力と空気を操作する力と心で思ったものを作り出せる力とどんな攻撃や毒をくらっても効かない体と・・・」

いろいろな願いを早口で喋りだす俺に神がちょっと待ったといい。今から俺が行く世界には超能力や魔法と言った代物がある事を教えてくれた。そしてもうちょっとゆっくり考えてもう一度整理してから願い事を決めると言ってきた。

そして俺は、結局いろいろと考えて以下の10個の願いを神に頼んだ。

願いその1・時間を操る力

願いその2・怪力（小指一つで10tの岩石を持てるレベル）

願いその3・全ての魔法の理解。

願いその4・全ての魔法を使えるようにすること。

願いその5・全ての超能力の理解。

願いその6・全ての超能力を使えるようにすること。

願いその7・どんな攻撃や毒もくらわない最強の肉体。

願いその8・今から行く世界の文字を理解する力。

願いその9・錬金術の理解。

願いその10・錬金術を使えるようにすること。

神はOKと軽くいって、杖を俺に向けた。

そして杖から光の塊が俺に向かって飛び出した。

光の塊が俺に触れた途端、俺の全身を光が覆った。

くえっ！！！！それってチートすぎない？（後書き）

感想待ってます。^^

願いが10個までってチートすぎないと思ってる方もいっぱい居られると思いますので次の章に詳しい説明を書こうと思っています。

（まあ下手をしたらそのままストーリー進めるかもしれません）

^:

ほんとに読んでくださってる方々には感謝してます。これからも温かい目で見守ってくださいると嬉しいです^^。

く主人公のお名前は？く（前書き）

いつもいつもこんなダメ作者の駄文を読んでくださって本当に感謝しています。

自分でも判っている気がします。この小説・・・展開遅つ。
とツツコンデ居る方もいるだろうと思います。本当にスイマセン。
いまの睡眠不足状態では、これが限界なんです。お願いですから見
捨てないでください^^：

・・・・・・それでは本文をどうぞ。

主人公のお名前は？

神の杖から飛び出してきた光が俺の体を包んだ。

そして数秒すると、光はだんだんと体の中に吸い込まれていった。

「よし。これでお主の願い通りのはずじゃ。それじゃあ力も与えたことだし早速行ってもらうかの」

神はそう言って、俺の胸に杖を突きつけた。

「えっ!？」

今の俺は自分がこれから行く世界が超能力や魔術がある世界としか聞かされていない。それに自分がそ

の世界でどんなことをすればいいのかも聞かされていない。当然の
ように俺は抗議する。

「ちょっと、待ってください！いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！」

遅かったさ。うん。神様酷すぎるでしょ。俺が「ちよつと待ってください」といった瞬間に俺を異世界

に飛ばしやがった。

しかし……どうしよう。よくよく考えてみれば今の俺には肉体が

無い。一応、前の世界で死んでるか

ら肉体はすでに火葬されていることだろう……ナンテコッタ。
ホントニドウシヨウ、コノママジ

ヤオレ、フウレイミタイジャナイカ。

そんな事を考えていると、頭の中にさっきのくそじじ……じゃ
なくて神の声が聞こえた。

『ほっほっほ。そういえばいい忘れつつたがお主には肝心の体が無
い。じゃから転生と言う形でお主の
魂を新たな肉体に固定せねばならん。まあ、わかりやすく言つとお
主は今までの記憶をそのままに生ま
れたての子供になるってことじゃな』

「ほんとにナンテコッタ。マジでか？マジなのか。俺が赤ん坊にな
るだど……まあ
いつか」

赤ん坊からやり直すのも楽しそうだし。

「それで神様、さっきは聞けませんでしたけど俺はこの世界で一体
どんなことをすればいいんです
か？」

『それはじゃな……自由じゃ。お主の好きなようにや
れ。わしはそれをただ見守るだけじ
や。』

「へっ！？俺の好きなように？」

『そうじゃ。お主に与えた10の力、それを生かすも殺すもお主しだいじゃ。わしは何も手出しはせんから、お主はお主自身のためにすべきことを見つけ、それをやり遂げる。それが悪なのか善なのか決めるのは全てお主じゃ。それじゃあわしも在るべきところに帰る。まあせいぜい頑張ることじゃな』

そっぴい残して神の声は聞こえなくなった。

そして……俺は新たな世界に生を受けた。

俺が生まれて5年後……

俺が生まれた国はセルドラント帝国と言って、この世界の中で一、

二を争うほどの大国である。

俺が生まれた家はいわゆる貴族といった、お金持ちの家だった。

と言ってもそれほどまでの名門貴族と言うわけでも無い。

この世界での俺の名前は、シリウス・マリスミティと言う。

ちなみにシリウスが名前でマリスミティが苗字だ。

俺はできるだけ自分の力がばれないように、病弱ぶっていつも部屋にこもっていた。

なんてったって小指で10tの岩が持てるのだ。下手をしたらデコピンだけで人を殺めてしまう。

誰もいない部屋で俺は毎日、神から貰い受けた力を制御・理解していった……

「主人公のお名前は？」（後書き）

やってしまった………OTL

まさかの能力説明後回し………

作者「ま、いっか」

シリウス「何でやねんっ」

作者「ぐはっ。やっやめるんだ。シリウス君の怪力でつつこまれたら死んでしまう。」

シリウス「うるせえ。俺の妹に合わせる。」

作者「シリウス君……君はやはり……シスコだったのか……！」

シリウス「ちっが~~~~う……俺はただアイツのことが心配なだけだ。」

作者「うんうん。わかってるよ、君の言いたいことは。でも近○相○はいけないぞ」

シリウス「消えて無くなれ……………」

作者「うつわあああああ……ふっふっふ。」

シリウス「なっ!?!なにっ!?!」

作者「甘い甘過ぎるぞ。まるで名前を書いて冷蔵庫に入れていたプリンを兄貴に横取りされたときぐらいの甘さだな。」

シリウス「それ、何の話？」

作者「うるさい黙れ。能力を極度のシス&ロリコンにするぞっ^^
ニコニコ」

シリウス「……………^^:」

シリウス「スイマセンでしたっ O T L」

でもやっぱり創造主の作者には叶わないシリウスであった。

さて次回、いよいよチート主人公の能力説明です。
能力説明だけで終わりにするかそのまま話を続けるか悩んでいます。

どなたか、この小説の感想くれませんか><
正直言っで自分で書いて楽しいのですが、知らない人が読んだら
どんな事を思うのか知ってみたいので是非とも感想お待ちしております。
^^:

「主人公設定説明章」（前書き）

やっとこの時が来ました。

主人公の能力などの説明が、やっとできます。

注意・この回では、物語は進まないのをご了承ください。

～主人公設定説明章～

主人公名 シリウス・マリスマティ

性別 男

年齢 肉体は5歳。精神年齢は17歳。

髪の色 漆黒（こちらの世界ではその者の能力によって髪や瞳の色が変化するらしい）

瞳の色 漆黒（左目）／金（右目）（右目は金色で時を止めるための媒体になっており眼帯をしている。眼帯にはその他にも意味がある）

顔立ち まあ普通にイケメン。（イケメンなんて死ねばいいのに・・・by作者）

装備品 力と魔力を抑えるためと目を隠すための眼帯。さらに呪水が染み込まれている包帯を両腕に巻きつけている。理由は力を抑えるためだ。その他にも、包帯を巻いた腕の上から封鎖（封印を施してある鎖）を巻きつけてる。

所持スキル

超能力・魔術・錬金術・最強の肉体・怪力・言語理解・時間操作など

所持スキルについての詳細説明

『時間操作』について

時間操作は超能力や魔術と違い、魔力消費及び肉体的疲労が一切ない。

しかしながら欠点はある。まず時間を戻すことはできない。そのほか時間を進めることもできない。

つまりは時間を止めるかゆっくりにすることしかできない。一回の使用で時間を止められる時間は2時間が限度。

『怪力』について

怪力は体質として引き継がれているため制御することは可能。しかしまだまだ成長段階のシリウスにとっては力の制御が効かない時がある。後、5年もすれば安定する事だろう。ちなみにシリウスは自身の力を抑えるために右目に封印の術式を用いた漆黒の眼帯を付けている。その他に力を抑制するための呪水を染み付けた包帯を両腕に巻いている。

『全ての魔法（魔術）の理解』について

全ての魔法の理解は、一度でも魔法を見たならその魔法の性質や能力及び術式などの情報を完全に理解することができる力だ。ちなみに文献などの書物でも一度見れば理解することができる。（ただし、魔法名を読み取らなくてはいけない）。その他、前にいた世界のアニメ（とある魔術の○書目録）で存在していた竜王の殺息は理解できたので前の世界のアニメの魔術なども使えることが判った。ドラゴンブレス

『全ての魔法（魔術）の使用』について

全ての魔法の使用は、先述で述べた『全ての魔法の理解』により得た魔法知識を自分の魔法として使いこなせるようになる力。

『全ての超能力の理解』について

全ての超能力の理解は一度見たりもしくは名前さえわかればその力がどんなものなのかを理解することが出来る。ちなみにこれも前の世界のアニメの中に存在していた能力を理解することが可能。

『全ての超能力の使用』について

全ての超能力の使用は先述の『全ての超能力の理解』により理解した超能力を使用する事ができるようになる力。

『どんな攻撃や毒もくらわない最強の肉体』について

この力に関してはいささか問題があった。俺は確かに神にどんな攻撃や毒もくらわない最強の肉体をください。って言ったが、別に魔力を強くしてくれとは言ってなかった。神様の馬鹿野郎はなにを血迷ったのか俺の魔力まで最強にしゃがった。ちなみに俺の魔力がどれくらいすごいかというと、普通の人は魔力数値が1000〜1000で魔術師は魔力数値が10000から15000位で歴代で【神の使い】と呼ばれて居た最強の魔術師が100000位だったらしい。そして俺の魔力は1000000だ。ほんとに神様冗談が過ぎますよ。まあ別にいいんだよ。うん。その膨大な魔力を押さえ込むのだけで2年半かかったとか、気にしてないよ。うん。その力を完全に制御するのに後5年は一歩も外に出れないとか気にしてないよっ。うん。

もう俺ニート宣言だよ。生まれた瞬間からニートだよ。貴族なのにニートだよ。どっかの牛井大好きなキン○クマン的な立ち位置だよ。

・・・OTL・・・なんか疲れた。さあ次の説明に行きましょう。
^^

『文字を理解する力』について

この力はこの世界に存在するあらゆる文字を読むことができる力。
判りやすく言うと、古代の魔法の文献などを読むため力である。

『錬金術の理解』について

この世界には存在しないようなので、一応この世界では主人公のみの力。まあ良くわからない方は鋼の錬○術師を思い浮かべてください。あんな感じです。

『錬金術の使用』について

こちらも鋼の錬金術s(ryを参考にしてください。一応形あるものなら何でも錬成は可能。しかもサイズに制限は無く使い放題。まさにチート。

「主人公設定説明章」（後書き）

まず最初にこの小説を読んでくださってる方々に感謝申し上げます。
ありがとうございます。

実は感想を下さった方の中に、『文字の理解』は文字だけの理解で
言語が伝わらないのではないかと質問をしてくださった方がいま
したので、この場を借りて謝らせていただきます。本当にすいませ
んでした。

確かに『文字の理解』という言葉では皆さんそう思う事でしょう。
本当にすいません^^：

これにはちよつとした設定があつたので、今回の章で説明しました
が、この『文字の理解』は様々な文字を理解することが出来るん
ですよ。

そして言語の理解についてですが、主人公は生まれたての赤ちゃん
と同じでしたから、われわれのように気づいたら言語を理解してい
たつて言う設定なんですよ。はい^^：なんかスイマセンつ！！
また何か気になることがありましたら言って下さい。出来る限り対
処しようと思います。でもでも、率直な感想を下さったら作者は大
喜びします。^^

それではまた次の章でお会いしましょう。^^

ゝ実は少女はお姫様？ゝ（前書き）

・
・
・
・
・
どぞ^^^／

「実は少女はお姫様？」

「さてと、今日の訓練はこれくらいにして夜ご飯でも食べようかな」
俺ことシリウスはいつもいつも部屋に引きこもっている。

5歳なのにここまで話せるのはご愛嬌ってことで^^:ちなみに人前で喋るときは一人称が僕になる。

食事は、この部屋で食べる。ちなみに食事はメイドの人が作って部屋の扉の前に置いてってくれる。

お風呂やトイレなども部屋に完備していて、日常生活に必要なものは全てそろっている。

しかし良く考えてみたらこんなに幼い子供が部屋に引きこもっていたらおかしいと皆思うだろう。しかも一人で。

しかし誰も俺を部屋から出そうとは思わない。何でだと思う？

それは俺の存在がおおやけにされていないからだ。

この屋敷の中で俺の存在を認知しているのは父親と数人のメイド。そして屋敷以外で唯一俺の存在を知っているのが

ガチャ。

「シリウスー」

いきなり部屋のドアをぶち破って進入してきたこの女の子だ。

なんのためらいも無く俺が横たわってるベットにダイビングしてきた。うほっ

正直きつい。いま完全に鳩尾に入っていましたよ。うん。

この緑の瞳とまるで空のような水色の髪を持った少女の名はシャルル・セルドラント。

なにを隠そうこの少女はセルドラント帝国の次期皇女候補である。判りやすく言うとお姫様だ。

年は8歳で俺よりも3歳年上だ。

ん？なんで姫様が俺みたいな下級貴族の、しかも存在がおおやけになっっていない奴の事を知っているかだって？それを説明するには今から1年前、俺が4歳のときに遡る。

一年前……

俺は生まれたときから病弱を装っていたのでその頃から存在していることは公にされていない。それは父親が病弱な息子に家を継がせては家の名に傷が付くとかほざいたせいで、俺は引きこもっている

と言うよりは軟禁されているに近い。なんて親だよまったく。

ちなみに俺がいる部屋は本宅から10mほど離れた別館の中の2階の一番奥にある。

まあ俺としては好都合なんだけどね、基本的にメイドさん以外来ないから多少力が漏れ出してもばれないしね。

そして俺が軟禁されて早4年が経とうとした時、俺の部屋に一人の少女が入ってきた。

もちろんその時の俺は右目に眼帯、両腕に包帯、その上から鎖を巻いていて、正直言つてただの変質者にしか思えない出で立ちであつたろう。

そして少女はベットで横たわる俺を見てこう言った。

「たつ、助けて!!!」

あれ!? 普通、俺のこの姿を見たら化け物とか化け物とか化け物とか言っちゃう筈なのに、第一声が「助けて!!!」だったよ???

助けを求める少女の後ろには鎧を着た兵士?らしき人達がいた。

あれ良く見るとこの女の子・・・メツチャカワエエヤン。

うん 僕助けちゃう。美少女は世界の宝だからね。うん

ベットから体を起こして俺は少女と兵士達の間に立ち塞がった。

兵士の数は全部で5人。判りやすいように兵士A、B、C、D、E、
としよう。

少女の前に立つた俺を見て兵士Cが口を開く。

「なんだこのガキ、気味がワリイ。」

続いて兵士Aが

「なんでこんな所にガキがいるんだ？」

すると兵士Bが

「こんなガキどうでもいいから早くしねえとお姫様の護衛の奴らが
駆けつけてくるぞ……！」

それを合図のように兵士A、C、D、Eが頷く。

そして兵士達は少女に向かって一斉に飛び掛ってきた。

「……」
「おりゃあああああ」
「……」

俺は眼帯を外し右目を開く、そして心の中で『時よ止まれ』と囁く。
すると飛び掛ってきた兵士達は皆空中で止まっている。もちろん俺
の後ろで震えていた少女も固まっている。俺は動かない兵士達の脇
腹に力を抑えたパンチをお見舞いする。（ちなみに力を抑えた状態
でも軽く500kの岩を持てたりする）

俺はそのまま兵士達の真後ろにある窓を開く。

そして眼帯を付けながら心の中でまた囁く『時よ動け』。

すると空中で止まっていた兵士達は後方へ吹き飛び。窓の外に落ちた。うん、全員気絶してる。

そして後ろに振り返り、一体なにが起きたのか判らない顔をする少女に手を差し伸べる。

「もう大丈夫だよ。」

恐怖を与えないように満点のスマイルで。

なんでか知らないけど少女は俺の顔を見て頬が真っ赤になった。どうしたんだろう？俺の顔ってそんなに変かなーと思いながらも、少女は俺の手を取り立ち上がった。

「あつ、ありがとう」

うーんなんでだろう少女は俺と目を合わせたくないのだろうか、そっぽを向いている。

やっぱり俺って、化け物みたいなのかな。はあ

「わっ、わたしのなまえはシャルル。シャルル・セルドラント。あなたのおなまえは？」

「僕の名前はシリウス・マリスミティ。」

名前を言い終わるとふと思った。あれセルドラントってこの国の名前だよな。

「まさか・・・お姫様？」

コクツ。っと少女は頷いた。そして俺に向かって「なんでこんな所にいるの？」と聞いてきた。

いや普通に考えたら逆になんでお姫様がこんな下級貴族の家にいるの？と聞き返すだろうが、俺はあえてそうは聞かず、

「僕は生まれつき体が弱いんだ。だから誰にも迷惑がかからないように、ここに住んでるの」

と答えた。

その後、僕の部屋にお姫様の護衛の人達が入ってきて、俺は隠れた。後で知ったんだが姫を狙っていた兵士達は、反帝国を名乗る組織からの刺客だったらしい。

ちなみに姫が下級貴族・・・つまり俺の家に来ていた理由は定期的に貴族の家で行われる、舞踏会を見に来ていたかららしい。まあ定期舞踏会は毎回違う貴族の家で行われるから、この日はたまたま俺の家で行われていたって事だ。それがあまりにも退屈で、本館から抜け出した所を例の刺客に襲われて、別館の俺の部屋まで逃げてきたって事らしい。それと俺が刺客を倒したことは誰も知らない。唯一その事を知っているのは、少女　　姫だけである。

まあなんだかんだで、その反帝国組織も刺客の証言により摘発されて一件落着いたんだが・・・

それから一年たった今。

「なんでここに来るんですか!？」

そう……あの事件からお姫様は、定期的に俺の家、しかも俺の部屋に勝手にやってくるようになった。

「だってシリウス様の事が好きなんだもんっ」

はあ、どうしよう。いつもこのお転婆お姫様はこう言って部屋に来る。

俺はシャルルの事が好きだ、でもシャルルは友達として俺のことが好きなんだろう。

それでもこんな化け物みたいな格好してる俺を友達としても好きになってくれるって事は、シャルルはとてもしゃんなんだろうと思う。

そしてシャルルは毎回のようによい医者が居るから診てもらって、と言ってくる。俺の体の事を気にしてくれるのはありがたいことなんだが、病弱を演技としてやっている俺からしたらとてつもない罪悪感が湧き上がってくる。

まあ俺も美少女の純粋な瞳で見つめられたら、ノックアウトしそうだがせいぜいあと5年はなんとしてもこの病弱設定を続けないといけないので、

「いつもいつもありがとうねシャルル。こんな僕のために。でも僕の病気はきつと治らない。そんな気がするんだ。」

いつもの台詞を吐く。正直言っただけで恥ずかしい。こんな台詞よく言えるな俺。いやホントに。

そしてこの台詞を言った後は、必ず姫様が泣き出す。

「うっ・うえ・・・ひぐっ・・・ひぐっ・・・」

美少女の泣く姿を見るのは辛い、でも仕方が無いんだ。こうでも言わないと俺の力がばれて大変なことになる。もう少しの辛抱なんだ。あと少しで力を制御出来るようになるから。後少しだけ待っていてくれ。

他愛の無いやり取りなどをしながらも月日は着実に流れていった・・・

ゝ実は少女はお姫様？ゝ（後書き）

なんて・・・なんて強引な終わり方だよコノヤロー。

作者は今、錯乱状態に入っています。

次回はいつきに月日が流れてシリウスが15歳になった所から始めます。

え？なんでそんなに月日が経ったって？そりゃあ、あれだよあれ。

もつと戦闘描写とか学園生活とか書きたいからだよコノヤロー

ホントにわがままな作者でごめんなさい土下座で謝らせて頂きます・

・・・OTL

でもでも次くらいからが最高に面白くなって来ると思いますのでご期待ください。

どなたか・・・評価を・・・評価と言う名の・・・元気をオラに分けてくれ！。

・・・OTL。

それでは次回またお会いしましょう^^

くお姫様はヤンデレなのだっ！！ーく（前書き）

・・・・・OTL

作者は本当に駄目な奴です。

もう笑ってやってください。

「お姫様はヤンデレなのだっ！……」

俺は今15歳になっている。

振り返ってみればこの15年間色々なことがあった。

姫と出会ったり、現存する魔術書や古の魔法についての文献などを読みつくしたりしたり。

さらには父親が死に結局は俺が家を継ぐことになったり。ちなみに俺が13歳の時だ。

力の制御は完璧に出来るようになったんだが病弱設定をいまだに続けている。だってそうだろ、良く考えれば生まれつき病弱って人がいきなり治ったー！！とか言ってきたらおかしいだろう……。それと腕の鎖と包帯はもうつけてない。まあ眼帯はつけっぱだが・

そして俺は今日もいつもの部屋で寝ていたのだが……

「シリウス様ー！！！！」

なにこれデジャヴ？？前にもあったような気がするんだが……

「姫さま……また来たんですか……」

またこのお姫様は……

「私のことはシャルルと呼べといっておるだろうが」

姫の薄い緑の瞳が僕を見据える。

「わかりましたよ。シャルル様。それで僕に何の御用ですか？」

なんでお姫様がこんな下級貴族の家に入り浸るのだろうか？

「用事も何も私はシリウス様のことが・・・好きだから・・・」

そうこれが原因だ。

はあく俺っていつの間に姫様とのフラグ立てたんだろう。しかもシリウス様とか呼ばれてるし俺。

「だからシリウス様、私と結婚してください。」

どっただけ姫様強引なんですか。

「姫様。軽はずみな発言はお控えください。」

すると部屋の扉のほうに居た姫の護衛らしき人が姫を注意する。良く見たらイケメンじゃん。

「私は・・・私は本当にシリウス様の事を愛しているのです。だから結婚するんです。」

するとイケメンな護衛の人が

「姫とこんなゴミクズ下級貴族とでは絶対に結婚など出来ません。」

いい加減、上級貴族である私と婚約して貰えませんかね。」

ウザッ。なにこいつメツチャウザッ。

シャルルの事を権力の道具としか見ていない所とか万死に値する。

「おい　「今、なんとおっしゃいました。」・・・っえ？」

俺がイケメン貴族野郎に言い返そうとしたとき、シャルルが冷めた声で話し出した。

「シリウス様の事を・・・侮辱しましたね・・・」

っえ、一体どうしたの？シャルルさん。目がうつろだよー。ちょっと怖いよー

イケメン貴族もシャルルの周りの空気が変わったことに気づいたのか、一瞬たじろいた。

しかしさすがは上級貴族と言った所か、ここでひいては駄目だと思っただのかシャルルに言い返した。

「所詮、下級貴族などましてやそこに居るゴミの様な奴は上級貴族の食べ残しを嚼る虫けらのような存在でしかないんですよ」

それを聞いたシャルルは何かのリミッターが外れたのか杖を取り出して呪文を唱え始めた。

「流れ出る青き水よ　その力を形に変えて　我に仇なす者を退けよ」

シャルルが呪文を唱え終わると、何処からともなく大量の水が現れイケメン貴族を飲み込んでいった。

・・・・・・・・ここ一応室内なんですけど。

扉の辺りが水びだしなんですけど・・・

シャルルはいつもこうだ。誰かが俺の悪口を言うとすぐに見境が無くなってしまふ。

これが世に言うヤンデレなのか・・・まあいいや、さすがに殺されたりはしないだろうからさ・・・

それにシャルルは可愛いしね。やっぱり美少女は世界の宝だ。うん。

シャルルは振り返って俺のベットにダイビングしてきた。うほっ

「えへへ・・・またやっちゃいました。」

かつ、可愛すぎるだろーーーー

ふっ俺もこう見えて精神年齢27歳の大人だぜ。こんなことで拳動不審になるほどのやわい精神じゃねえぜ。

仰向けになつて俺の上にまたがるシャルルに俺は

「本当にすいません、シャルル様。でも、俺みたいな下級貴族ではシャルル様には釣り合いません。だからもうここには来ないでください」

と話す。もうシャルルを俺みたいな奴に縛り付けたくない。シャルルは毎日のようにここに来ては国の様子や学園での生活を話して言ってくれる。正直言って嬉しい。それに俺はシャルルが大好きだ。だから、シャルルを縛り付けたくない。だから拒絶する。

シャルルは瞳に涙を浮かべる。その様は18歳とは到底言いがたいものだ。

「・・・ひぐっ・・・ひぐっ・・・わっ・・・私・・・私じゃ・・・駄目なんですか・・・ひぐっ・・・」

なんていい子なんだ。身長が155センチくらいの華奢な体をしているシャルルは本当に11年前から成長していないように感じる。

「シャルルおいで」

俺はベットから上半身を上げて、シャルルを抱きしめた。やっぱりシャルルに本当の気持ちを聞かないと駄目だ。だから俺は

「俺はシャルルの事を愛している。でもシャルルは俺が側にいたら困るだろう」そんなこと無いです。私はシリウス様さえ居てくれたら何もいりません」・・・シャルル・・・」

この瞬間、俺は思った。俺はなんて馬鹿だったんだろうと。そして俺が彼女を縛っていたのではなく彼女が自分からそうしていたことに気付いた。

俺の胸の中で泣く少女を見て、俺は彼女に見合う男になる。そう心の中で誓った。

そして次の日。

「シリウス様―」

ガチャ。

「あれっ……シリウス様？」

ベットにはいつも居るはずのシリウスが居ない。

それどころか部屋の中には人の気配が無い。

一体何処に行ったのだろうか？シリウス様がベットに居ないなんておかしい。

そう思っていると、後ろから人の気配がした。

「誰っ？」

振り返るとそこには黒いマントをはおりいかにも魔術師って感じの人が3人居た。

魔術師の一人が

「これはこれは姫様ではないか。丁度いい。われわれと一緒に来てもらえますかな」

と言ってきた。そして姫は、

「私のシリウス様を何処にやったの？」

逆に言い返した。シリウスは姫様の物らしい。

そして先程とは別の魔術師が

「あの方なら先程捉えました。あなたが抵抗しなければ、あの方の命は保障しますよ」

と言った。もちろん姫は、シリウスが何か特別な力を持つてることは知っていた。それが何なのかは知らなかったが昔、シリウスが姫を反帝国組織の刺客から救ったことをいまだに覚えている。

でも相手は魔術師が3人。いくらなんでもあの時の刺客とはレベルが違う。さすがにシリウスが特別な力を持っていても敵わないだろう。

そう思った姫は

「わかりました。シリウス様には指一本触れないでくださいね」

と言った。

すると3人目の魔術師が、

「この女あの御方のところに連れて行く前に俺が味見してやるよ」

そう言っただけ近づいてきた。どうしよう抵抗したらシリウス様が、殺されてしまう。

魔術師の手がシャルルに触れそうになった瞬間、吹き飛んだ。

他の魔術師は何が起こったのかわからないでいる。

それもそのはずだ。いきなり一人の魔術師が跡形もなく消し飛んだのだから。

「一体なにが起きた？」

残った2人の魔術師の一人が口を開く。

かんじんの姫様もなにが起きたのかわからない様子。

すると残った魔術師の一人がいきなり消えた。

残っているのは後一人だけ。

「なっ、なにが・・・なにが起きているっ！！！！」

すると姫の前に一人の少年が立っている。

「きつ貴様だな！？一体何をした！！！！」

少年はもちろんシリウスだ。

「その質問に答える価値はない。お前らこそ何者だ？」

魔術師は少年が出した質問を無視して逃げようとする。

「まっまずは形勢を立て直す必要がある。」

魔術師は呪文を唱えだした。

「光よ来たれ 我をか地へ 導きたまえ」

魔術師は呪文を唱え終わる瞬間。 気絶した。

もちろんやったのはシリウスです。

「さてと・・・シャルル様。 お怪我はございませんか？」

床に倒れこんでいるシャルルに手を差し出す。

そしてシャルルはその手を取って・・・俺を引っ張った。

下から引かれたせいで横たわるシャルルの上に倒れた。

とっさに俺は立ち上がる。 そしてシャルルも。

見つめ合うシャルルと俺。

「何処に行っていたんですか？心配したんですから。」

シャルルが泣きそうな声で呟く。

「本当にすみません。なまっている体を動かしに行っておりました。」

そう、俺は今日初めて家から出て色々な場所を見て回っていた。

帰ってきたら複数の魔力反応があったからもしやと思ったが、その通りだった。

それでもシャルルには怪我一つでも無かったから良かった。

「シリウス様お体は大丈夫なんですか？」

「うん。最近体調が良くなってきていてね、もう少ししたら完全に治るとおもうよ」

嘘です。すみません。本当は何処も悪いところなんてありません。本当にスイマセン。

心の中で謝る俺。シャルルは俺が完全に治ると聞いて、すごい笑顔で喜んでいる。

シャルルは突然話を切り出した。

「お体のほうが良くなってきたんでしたら是非、学園に入られてはどうでしょうか？シリウス様は何か特別な力を持っているようなので入学試験は楽勝だと思いますよ。」

たしかにこちらの世界の学校に行ってみたいと前々から思っていた。

「うん。そうだね。一カ月後にある入学試験を受けに行ってみるよ。」

そう言ってこの日は別れた。

シャルルは帰る時に

「学園で私以外の女の子とイチャイチャしたらどうなるかわかりませんよ。」

と言っていたみたいだが、聞かなかったことにしよう。何が起きるかわからないしね。うん。

後から知ったのだが俺の屋敷に入り込んでいた魔術師達は俺と姫の仲を妬んだ上級貴族の人が送り込んできたらしい、俺を殺すためにこの事実を知った姫は、犯人を探し出して
まあこれ以上は言わない方がいいだろう。うん。

明日から、屋敷の周りに防御結界でも張って、一部の人が入れないようにしとかなないとね。
でないと姫が侵入者を殺しちゃうかもしれないからね。

くお姫様はヤンデレなのだっ！！ーく（後書き）

次回いよいよ学園編突入です。

皆さん評価を・・・・・・・・評価を・・・・・・・・ボタンッ

次回楽しみにー

「満員列車は初めてだ」

現在俺はメツチャでかい門の前に居る。

今日は、セルドラント帝国学園の入学試験の日だ。

ちなみに俺は遅刻した。とにかくわけを聞いてほしい。

今日俺は、朝早くに目覚めた。もちろん今日が入学試験だって事を知っていたから、そうしたのだがいざ準備をして列車に乗ると、満員列車の餌食になってしまった。おかげで俺は、学園がある駅を通り越して終点まで行ってしまったのだ。しかもそれを3回も繰り返ししてしまった。そのせいで俺が学園に着いた頃にはとくに試験は終わり、受験生も皆帰ってしまったていたのだ。俺の中で列車がトラウマになった瞬間だった。

はい言い訳終了。

どうしよう……このまま家に帰ってもいいのだが、そんなことしたらシャルルに殺されてしまう……本当にどうしよう。

俺は校門の前でウロウロする。はたから見たら、眼帯をしている拳動不審な変人に見えるだろう。

俺が校門の前でうろついていると、突然後ろから話しかけられた。

いきなりだったので俺は体全体をビクツとさせた。

「あのーもしかしてシリウス・マリスミティさんですか？」

後ろを振り返ってみると、眼鏡をかけたいかにも真面目そうなお姉さんが立っていた。

とりあえず返事をする。

「はい、そうです。」

するとお姉さんが、

「学園長がお待ちですので、付いて来て下さい。」

と言つて門を開けた。俺は言われるがままに付いて行く。

終始無言の中、広い校庭をぬけてたどり着いた3階建ての校舎。

その中にお姉さんが入っていったので、後を追う。

そして三階に上がり、廊下の突き当たりに『学園長室』とかかれた部屋があった。

お姉さんは部屋の前に立ち止まると扉を軽くノックした。

コンッコンッ。

ノックの後、部屋の中からどうぞ、と聞こえたのでお姉さんが扉を開いた。

部屋の中は赤を基調とした物が多く見受けられ、一つ一つに気品が

満ち溢れている。

扉を背に真正面には見た目だけで相当年を取っていることがわかる老人が椅子に腰掛けていた。

「学園長。シリウス・マリスミティさんをお連れしました。」

静寂な空間にお姉さんの澄んだ声が響き渡る。っていうか、このいかにもボケてそうな人が学園長ってどうよ。今の時代こんなに髭を伸ばしているのは位だぞ。まあこつちの世界には居ないけど。

学園長はお姉さんに向かって

「案内ご苦労、ミリシャ君。君はもう仕事に戻ってくれ。」

と言った。それを聞いたお姉さんは「それでは、失礼します。」と言って部屋を出て行った。

あのお姉さんミリシャって言う名前なんだーとか思っていると、目の前に居る学園長さんが俺に向かって話し出す。

「君がシリウス君か、君の事は前から姫様に聞かされているよ。今日は君が来ると姫様に言われて楽しみにしていたんじやが、まさか遅刻してくるとは思わなかったの。」

今思えばこの学園は帝国が運営しているから王族との関わりもあるのか、

「僕はどうすればいいんですか？」

一応ダメもとで聞いてみる。

「君には特別学級に入学試験免除で入ってもらおうと思う。」

「ええっ!？」

学園長が凄いことをサラッといった。

この学園には大きく分けてそれぞれの学年に5つのクラスがある。

魔力が高い者がいるクラスがAクラスでそれから順にB、C、D、Eクラスと振り分けられる。

図にするとこんな感じ A > B > C > D > E

DクラスやEクラスに居る人達は皆、魔力が生まれつき無く庶民の人達が主だ。

ちなみに特別学級と呼ばれている学級はA～Eクラスとは別にあつて、Sクラスとも呼ばれている。

たまに凄い力を持った人が居てそういう人が入るクラスとなつていゑる。一つの学年に一人居るか居ないかのもの凄いクラスなのだ。なのでこのクラスに限っては学年が関係ない。つまり、12歳の子も居れば15歳の子が居たりするのだ。

この学園には全部で6つの学年と31のクラスが存在する事になるが、1クラスが大体50人ほどなので全校生徒は約1500人程だ。学年が関係ないSクラスの生徒数は現在12人らしい。俺が入ると13人になる。

「俺は別にかまわないんですが、本当に入学試験は受けなくてよろしいんですか？」

もしも入学試験が免除なら能力測定などのややこしい検査を受けなくてすむ。力が制御できるようになったからと言って、何かの拍子で力が放出でもしたら大変なことになるからな。

「うむ。シリウス君が強いって事は姫様から聞いておるから、入学試験は受けなくてもけっこうじゃ。それじゃあ一週間後の入学式で待っておるぞ。」

俺は扉の前で一礼して、部屋を出た。スキップして廊下を走ってゆく。

少年が部屋を出て行った後に老人は小さく囁いた。

「姫様もお人が悪い。自分のクラスに彼をお入れなさるとは……姫様の立場を考えてほしいものじゃな。」

静寂な空間に老体のしゃがれた声が響き渡るのだった……

く満員列車は初めてだく（後書き）

本当に・・・スイマセン。予定が狂いました。

でもでもでも、何とか物語を進めれそうな気がします。

次回も頑張って書きますので是非読んでください。^^

入学式・前編（前書き）

……ドゾ。

入学式・前編

俺がセルドラント帝国学園特別学級 通称『Sクラス』に入学する事が決まってから1週間が経った。

今日はセルドラント帝国学園の入学式の日だ。学園は列車で3駅越えた所にあるのだが………また俺は満員列車の餌食になっってしまった。

もう………なにも言わないぜ………グスンッ。

前と同様、最後の駅に着いた時には涙が止まらなかった。

ふいに終着駅のホームを見ると、セルドラント帝国学園の制服を着た腰まで伸ばした赤髪が印象的なお嬢様っぽい雰囲気の子が3人の男達に絡まれていた。

3人の男の一人が言う。

「お嬢ちゃん、もう逃げられないぜ。さっきはよくも俺達の仲間をぶつとばしてくれたな」

すると赤髪の女の子は

「あんた達から絡んで来たんじゃない。自業自得よ。私は忙しいんだから、そろそろ消えて貰えるとありがたいんだけど……ダメみたいね。」

そう言い放った瞬間、先ほど喋っていた男の顎に少女の膝蹴りがクリーンヒットした。男は音を立て倒れる。

ドサッ。

それを見た他の男二人が、声を合わせる。

「てっ、テメー！！！！」

そして残る二人の男のうち一人が少女に襲いかかる。

しかし少女はなんら動揺もせず、体を一步横に引いて目標を見失った男の鳩尾に体重を乗せた右膝を入れる。男はドサッと前のめりに地面に倒れこむ。残る男はあと一人。仲間二人がものの数秒で倒された事に啞然として立ち尽くしている。そして少女が立ち尽くす男の顔面に体重を乗せた膝蹴りで止めを刺した。

「ふん。所詮クズはクズね。次からはナンパなんて惨めな真似しない事ね。」

少女は倒れている3人の男達を見下して腰に手を当て勝ち誇っていた。

するといきなり湧いて出たかの様に、少女の周りを50人ほどの男達が囲った。

「この女あま調子に乗りやがって。こうなったら薬漬けにして高く売りさばいてやるぜ。」

さすがにこの人数では太刀打ちできないのか少女は顔をしかめる。

「数にものを言わせてたった一人の少女を痛めつけようとするなんて最低な奴がすることね。」

そんな事を発する少女に男達のリーダーみたいな奴が口元を緩める。
ニヤツ。

「最低？確かにそうかもしれないな。で、それがどうした？」

と言った。そして男は50人近い男達に、「この女を捕まえる！！」と指示を出した。

男達は少女に近寄る。

（もうつ・・ダメか！！）

少女は目を瞑った。次の瞬間

ガタンッゴトンッ。ガタンッゴトンッ。

少女は揺れる列車の中に居た。

「一体？何が起きた？私はさっきまで駅のホームに居て、男達に囲

まれていたはず
」

少女が辺りを見渡すと、少女の隣に居眠りをする同い年位の眼帯をした少年が居た。

（何で私は列車の中に居るの？それにこの男は誰？）

少女が身に起こった出来事を整理しようと思った時、少年の目が開いた。

「んゝ良く寝たー。」

少女と視線が合う。

「やっと起きたみたいだね。君の寝顔を見ていたらいつの間にか僕も眠ってしまったよ。」 ニコッ

俺は出来る限りの笑顔をふるまう。

やっぱり第一印象は大切だよな。前読んだ本にも笑顔がその人の価値を決めるって書いてたしね。

「なっ・・・／＼私の寝顔を・・・ずっと見てたんですか・・・／＼」

（なっ なっ 何！？／＼この眼帯少年メツチャカツコイイ／＼これが初恋ってやつなの！？／＼／）

あれ・・・顔が真っ赤になってるよ。もしかして俺みたいな男に寝顔見られるの嫌だったのかな。

「本当にごめん。僕みたいな奴が君みたいなかわいいこの寝顔見てしまつて。普通嫌だよ。本当にごめん。」

やっぱり謝っておかないとね。

「いや別に・・・嫌とかそんなんじゃないくて・・・むしろ・・・可愛
いとか言われると・・・その・・・逆に嬉しかったり・・・・・・キヤ
／／／／」

なんだろう声が小さくて聞き取れない。

顔が真っ赤な少女は急に何かを思い出したかのように、声を張り上げて俺に聞いてきた。顔が近いんですけど・・・

「それよりあなた何者？一体何をしたの？」

やっぱりそう来るか。まあ時間を止めて列車に移動させたとか言つても信じないだろうから・・・

「僕は何もしていないよ。ただ、さっきホームで一人の男が現れて君を囲んでいた男達を一瞬で吹き飛ばしたんだよ。それで君は気絶しちゃつて、その男の人が僕に君を押し付けて消えたんだよ。」

さすがにこの嘘はないな。

「ふんそうなの・・・。あつそういえば私の名前言い忘れてたわね。私の名前はシルク・シャーロフィ。シルクって呼んでね。」

うわゝ信じてくれたみたい。この人単純だな。

「うん。わかったよシルクさん。僕の事はシリウスでいいから。」

まあなんだかんだあって。学園がある駅で降りた俺とシルクさんはそこで別れた。別に一緒に学園まで行っても良かったんだけど、行きたい所があったから駅に着いたときに別れた。シルクさんはまた学校で。と言って手を振っていた。どうでもいいことだがシルクさん完全に遅刻だよな。まあ俺もただだね。

俺はシルクさんと別れた後、先ほどの終着駅のホームに向かった。

え？なんでかって？それはもちろん俺が悪い人嫌いだからだよー。俺の用事ってのは、さっきまでシルクさんに手を出そうとしていたゴミ野郎共の成敗さー。

終着駅のホームに出たところでさっきの男達がまだシルクさんを探していた。

「くそつ。何処に行きやがった。あのアマー。お前らもっと良く探せ。」

リーダーらしき男が、指示をしている。

俺はその男に駆け寄って、

「バイバイ。」

と囁いた。

「ああんゴラあー。なんだテメー、ぶち殺されたいのか。俺に話しかけるんじゃないよ。」

次の瞬間、男はおろか仲間の男達まで消え失せた。

え？何したかつて？

飛ばしたのさ北極に。

俺は踵を翻し、颯爽と列車に乗り込んだ。もちろん誰も俺が男達を消したなんて思わない。

だって皆の記憶塗り替えたもんね。いや、便利だよね超能力って。うんマジで。

このあと俺は入学式に5時間遅れで着いたとさ・・・

く入学式・前編く（後書き）

はあゝ疲れた！。

〈入学式・後編〉（前書き）

気がついたらPV3万超えてました。

この駄作を読んでくれている皆さん心から感謝致します。

それでは本文をどうぞ^^/

入学式・後編

俺は、現在入学式が行われていた体育館みたいな所にいる。

体育館はもぬけのから。

（そりゃそーだよな。5時間も遅れたら終わってるよな。うん。）

入学式なんてとうの昔に終わって新入生の皆さんは帰っていました。

あれっ？何でだろう、涙が止まらないぞ。グスンッ

うなだれる俺。不意に後ろから気配がしたので振り返ってみるとそこには学園長が居た。

「シリウス君。来ないから心配したぞ。まさかまた遅刻してくとは思っていなかったの。」

「はあゝまあ来る途中に色々ありまして、本当にすいません。」

「別に遅刻したからって罰を与えたりはせんよ。それよりも君は寮で暮らすのじゃろ。ならば誰かに案内をさせよう。」

「あつ、はい。ありがとうございます。」

そう、俺はこの学園の寮に入る事になってる。しかも合格通知と一緒に届いた学校説明書を読んだ限りではSクラスの生徒は1人部屋らしい。

「それじゃあミリシャ君、彼を頼む。」

学園長が後ろを振り返って言った。

すると学園長の後ろから、この前俺を案内してくれたミリシャ先輩が顔を出した。

「わかりました。それではシリウスさん、私に付いて来てください。」

「は、はいっ」

俺は言われるままについていった。

そして歩く事30分。

「着きましたよ。ここがシリウスさんが新しく入る寮です。」

ミリシャさんが視線を向けた先 そこには下級貴族の俺の家よりも立派な屋敷が立っていた。

「凄い。」

あまりの豪華さに声が漏れた。

「凄いですよね。私もいつか強くなって。この寮 Sクラスに入るのが目標なんです。」

目の前にある。屋敷もといSクラス寮を眺めながらミリシャ先輩は

言う。

先輩ならきつと大丈夫ですよ。そう言おうと思ったが止めた。俺みたいに入學試験も受けずに姫様のコネで入ってきた奴が努力して入ろうとしている人に言っても意味が無いと思ったからだ。

でも・・・俺は

「先輩、俺みたいな奴が言うのもなんですが絶対に来てください。Sクラスに。俺はずっと先輩を待っています。」

先輩がSクラスに入れるのを心から応援しようと思う。

「シリウスさん／＼／＼それはもしかしてプロポー・・・ごによごによ・・・／＼／」

なにを言ってるんだろう？ってやっぱり俺みたいな奴がこんな事言ったから怒ったのかな。先輩、顔が真っ赤になる。

俺は顔が真っ赤？な先輩に「案内ありがとうございます。」と言って寮に入った。

シリウスが行った後にミリシャは呟いた。

「絶対にSクラスに入らないとね。シリウス君が待っているから・・・キャ／＼／」

この日ミリシャがシリウスさんからシリウス君に呼び方を変えた事は本人以外誰も知らない。

〈入学式・後編〉（後書き）

正直に言います。本文短くてスイマセンスイマセンスイマセン。

ここで言い訳をさせていただきますと、前編と後編はもとも一つだったのを無理やり2つに分けて、改文したからなんです。

だってだって・・・一つの話にヒロインが二人作られるって納得いかないんだもん。

いや本当に本当にすいませんでしたっ！！！！

く寮にてヤンデレく（前書き）

始めに言っておきます。なんか・・・すみません。

いまなぜかとても謝りたい気分です。ごめんなさい

「寮にてヤンデレ」

現在俺はミリシャ先輩と別れて、寮に入った所だ。

寮って言うか屋敷だよね。うん。

寮と言うには豪華すぎる内装を眺めながらそう思っていると目の前にメイドさんが現れた。

「初めまして。シリウス様。私はこの寮の管理を任されているリーザ・クライアンと申します。お呼びになる時はリーザとお呼び下さい。」

メイド リーザさんは頭の後ろで金髪と言うよりは少し黄色っぽい髪を一つに纏めている。これが世間一般で言うポニーテールと言うものだろう。身長は160より少しくらいで胸も残念な事になっている。顔もまあそんな体系に比例してか幼くみえる。リーザさんはシャルルに近い体系だ。俗に言うロリってやつ。俺は前の世界ではシス&ロリコンだったからこんな可愛い子を見ると愛でたくなる。

そんな事を考えているとリーザが俺を部屋に案内してくれた。

「ここがシリウス様のお部屋になります。冷蔵庫の中身などは定期的に仕入れさせていただきますのでご了承下さい。」

「あつ、はい。そのほうが助かります。ありがとうございます。リーザさん」 ニコッ

リーザさんいい子だな〜見てるだけで癒される〜。

「・・・／／／そつ、それでは、わたつ私はこれで／／／」

リーザさんはそそくさと部屋を出て行った。

あれっなんだろう。俺がリーザさんの顔ばかり見てたから怒っちやったのかな。

部屋を出て行くリーザさんの顔がほのかに赤かったような気がした。部屋には冷蔵庫や机、ベット、キッチンなど生活に必要なものは揃っていた。もちろんトイレやお風呂もあった。俺がベットに横になると・・・

ぐうう〜

俺の腹の虫が鳴いた。

現在の時刻は13時30分。本来なら昼食を食べる時間はもう過ぎているのだがこの学校に来る途中でいろいろあったせいでまだ昼飯にありつけていない。なのでベットから起き上がり部屋に備え付けである冷蔵庫の前に立つ。冷蔵庫を開けてみると肉や魚、そのほかに今まで見たこともないような野菜や果物が入っていた。

ここで俺の特技を教えよう。それは料理。料理なのだ。

重要な事なので二回言ってきました。

前の世界では妹と二人暮らしだったので、実質家事全般を俺が行っ

ていた。

だから必然的に俺の料理は日を追う事にレベルを上げていったのだ。今はもうプロ顔負けの腕前と自負しているが、こちらの世界では料理を一回もしたことがない。

なんてったって貴族ですから。

こちらの世界で料理したことがない〓未知の材料、なにそれおいしいの？

っていう公式も成り立ったりする。でもそこは俺の料理人魂が意地を見せる。

俺は冷蔵庫の中にあつた未知の食材全てにかぶりついた。

ムシャムシャムシャムシャ……

未知の食材を俺の料理人（自称）としての舌が味わう。

ムシャムシャムシャムシャ……ガリツ……

「ガリツ!？」

俺の手には未知の食材Xがあつた。

他の未知の食材はやわらかく人参や大根、とうもろこしみたいな味をしていたのだがこの食材は違う。

味が無いとかそんな問題ではなく硬いのだ。今まで噛んだ事が無い硬さ。

もちろんそんな硬いものを食べようとした俺の前歯は砕け飛んでいる。口内には鉄の味がする。そう俺の血の味。

痛い。とてつもなく痛い。常人なら泣き叫ぶほどの痛さだろう。

しかし俺の願い事の一つ『最強の肉体』のおかげで砕けた前歯はすぐさま元通りになった。

今のはやばかった。いやほんとマジでやばかった。

俺は料理をすることなく昼飯は未知の食材達だけでお腹がいっぱいになった。

ただひとつもう二度とあの食材は食べないようにしようと思心から思った。

俺はうなだれるように備え付きのベットに仰向けになって、瞳をとじた。

『昼寝』誰が考えたんだろうこのフレーズ。考えた人はきっと無職だったんだろう。

お腹がいっぱいになった事もあり俺はすぐに眠りに付いた。

「ん……ん……」

今、俺は寮の自室にて昼寝と言う最高の暇つぶしをしていたわけなんです。違和感を感じて目を覚ました。いつもより体が重いと感じて自分のお腹辺りを仰向けの状態でみてみる。

そこには　俺の体をベットとして使うシャルルの寝顔があった。シャルルの体は小さい。だから体重は軽いわけで、別に嫌なわけではない。

むしろこんなに可愛い女の子が俺の体の上で寝ているというだけで
幸せいっぱい腹いっぱいだ。

俺はいつのまにかシャルルの頭をなでていた。

「シャルル……大好きだ。」

俺の気持ちはどうやら言葉に出ていたらしい、寝ていたはずのシャルルが急に目を見開いた。

「シリウス様ー。いまなんていいました？」

きつと俺が頭を撫でている時から起きていたに違いない、なんてやつだ。

「いつ、いや何も言った覚えは無いですが、シャルル様の気のせいではないですか。」

恥ずかしくて視線が合わせられない。シャルルはむううと唸って、ベットから降りる。

「シリウス様、なんで入学式サボったんですか？」

シャルルが俺に聞いてくる。なんて答えたものの。

まさか美少女を助けて遅れたとはいえないし………

「みつ、道に迷っちゃいました。」

「ふゝんなんだそうだったんですか。私はてっきり悪者に追われて

いる美少女を助けてたんじゃないかと思ってました。」

「……………嘘だろ。まさか

「まさか……見てたんですか？」

恐る恐る聞いてみる。

シャルルはニコツと微笑む。

「やっぱりそうだったんですね。」

うおおおおおおおおお、はめられた——————
——

ちよ、シャルルさん怖いですって。目が逝っちゃってますって。

「……私なんかよりも……シリウス様は他の女の子と居るほうが楽しいですね……」

ちよ、何処から出したのそんな鉈。あなたのポケットは某〇型ロボットの四次元ポケットなんですか？

ちよ、そんな殺気出して近づいてこないでください。助けてード〇えも〜ん。

「シリウス様は誰にも渡しません。いつそ私の物にならないのなら……」

ちよ、ヤンデレ自重してください。こうなったら仕方が無いあの手

を使うか。

実は二年前にもシャルルがヤンデレ全開状態になった事があった。

あの時は俺がメイドさんと楽しく会話しただけだったが、殺されそうになった。

俺はその時にシャルルをなだめた手を使おうと思う。

鉈を持つシャルルに近づき魔法の言葉を囁く。

「君を愛してる。」

そしてそのままシャルルを抱きしめる。俺の胸辺りしかない身長
のシャルルは俺の胸に頬をスリスリしてくる。そして俺を見上げて

「許してあげてもいいですけど一緒に風呂に入って寝てください。」

くうく上目使いつて反則だろ。こんな可愛い顔されたらどんな男も
いちころだって・・・いやマジで。

変な汗が吹き出してくる。どうしようどうしようどうしよう
う、仮にも相手は一国の姫。もしも色々ヤバイ方向に事が進んだら
シャレにならない事になる。

「だめ・・・ですか・・・？」

そんな目で俺を見ないでーーーーさっきのヤンデレは一体何処に消
えてしまったんだー

「わっわかりましたよ。今日だけですからね。」

シャルルはパアツと明るい顔に変わり、早くお風呂に入りましょう。なんて言って来る。

部屋の奥にあるお風呂場のほうに行くシャルルの背中を見ながら俺はため息をつく。

「あんな可愛い子が俺みたいなダメ男の何処をすきになったんだろう?」

恋愛は謎だ。なんて思いながら俺はシャルルの後を追った。

ゝ寮にてヤンデレゝ（後書き）

まさかの次回に続くパターン。

・・・とりあえず逝ってきます。

え？どこに？なんてツツコミはしないでくれるとありがたいです。

あつそうだ、年始はちよつと更新遅れちゃいます。まあ家庭の事情
つて事で^^：

次回はときどきわくわくロリっ子お姫様との入浴&睡眠です。

シルクの件はこの話を書きたいがための布石だったりします。まあ
他にも派生はしてるんですが、次回楽しみにしてください。^^

それではグッバイ（ ）ノ

くどきどきわくわくらんらん (前書き)

・ ・ ・ ・ ・ 本当にサーセン。 > <

駄文ヒヤッホーイ・ ・ ・ 作者壊れてきました。

まあ読んでみてください。

くどきどきわくわくらんらん

「シリウス様ー 早く入ってきてくださいよ」

「いつ、今行きますっ」

やばいぞノリでわかりましたなんて言ってしまったが、相手は18歳の女の子。かたや俺は肉体的に15歳の男の子。

そんな二人が一緒にお風呂に入るって……マジでやばいよな……しゃれになんねえぞ……

えええい、こうなったら仕方が無い。俺も男だ。一度OKと言ってしまったからにはやるしかない。

と言うことで俺は意を決して服を脱ぎ、大事なところにタオルを巻いてお風呂場に行く。

ガチャ。

お風呂場に繋がる少し硬めの戸を開けた途端にタオル一枚のシャルルが俺の胸の中に飛び込んできた。

「シリウス様ー」

「うわっ、危ないですってシャルル様。」

シャルルは俺の胸とお腹の中間らへんに頬を擦り付ける。スリスリスリスリ。

ちなみに現在の俺、大事なところ以外はスッポンポンなわけで生でシャルルの肉体と触れ合っている事になる。（注意・変な意味じゃないよ。うん。）

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ハア・・・シリウス・・・様・・・の・・・体・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ちょｗｗｗｗ、姫様ただけ興奮してるんですか、そろそろ離れてほしいんですけど・・・

俺はなんとかしてシャルルを引き離そうとする。

は・・・離れない！！！！ただけ力強いんだこの子は。

仕方が無いので俺はシャルルを抱き上げる。抱き上げたときに「キヤ、シリウス様そんなに私のことを・・・」なんて言っていたが気にしないことにする。

シャルルは例のごとく身長が低いので俺が抱き上げると足が床につかなくなる。なので俺はそのまま浴槽に入る。案外浴槽が広い事に驚いたがそんな事には気が回らない。なんてったってこの俺にしがみ付いている女の子をどうにかしなければならぬからな。

さてと・・・どうやって離そうか・・・「愛してる」はもう使ってしまった（しかも裏目に出てしまった）し・・・あの手は俺の貞操が危うい事になるし・・・よしあれをするか。

俺はシャルルの顔を両手で優しく掴み、俺の顔の前に寄せた。そし

て………チュ。

キスをした。もちろん唇にね。仕方ないじゃないかこれしかなかったもん。べっ別に俺がキスしたかったとかそんなんじゃないんだからねっ。

「

」

シャルルは声にならない叫びを上げている。顔は茹蛸のように赤く、目の焦点があつていない。ちよつと刺激が強すぎたかなと俺が思ったのも束の間、シャルルが俺の顔に手をそえてきて……………

ちゅ……んちゅ………ちゅ……んちゅ………ぷはあ

キスしてきやがった。しかもでいーぷだぜ、でいーぷ。

いつの間にこのお姫様はこんな遊びを覚えたんだ。（まあ半分くらいは俺のせいだとしても……………な）

「はあ、はあ、シリウス様ベツトに行きましょう……………」

おいおい今の展開でそんなこと言われたら考えられる結末が最悪の方向だぜ。しかし俺はその結末を覆って見せるぜ。俺はなんとしても俺の貞操を守り通してみせる。俺の本能が貞操を守れと叫んでいるから俺はそれに従うまでさ。そして今の状況で俺がしなければいけないことは……………

「シャルル様、まずは頭と体を洗いましょう。」

とりあえず風呂から上がらないとね。うん。

「わかりました。シリウス様も早くしたいんですね。よしささとあがってベットに行きましょう。」

おいおいこの子、変な誤解してるぞ。ってか姫様ってこんなエロキヤラだったか？

まあ早くあがる事さえできれば俺の勝ちだ。気づかれずに逃げる方法なんていくらでもあるからな。

「それじゃあ私は早めに行って準備しておきますのでシリウス様は服を脱いでベットにきてくださいね。」

準備って・・・なんのだよっ。

まあなにはともあれなんとかお風呂からあがる事には成功した。このまま逃げれば・・・

「シリウス様、早く来てください」

ナンテコツタ。脱衣所的なスペースで服を着替えて終わって逃げようかと思った瞬間、シャルルが来てしまった。どうしようどうしようどうしよう。俺がここで力を使って逃げたら、俺の力がばれてしまう

・・・

「はやくはやく」

シャルルが俺の手を握ってベットまで行く。

「さあシリウス様、一緒に寝ましょうね。」

やばいお。本当にどうしよう。

シャルルは俺のベットに入る。俺はシャルルに腕を掴まれているのでシャルルの横に入る。

「はぁ・・・はぁ・・・ついにシリウス様と一夜を過ごす日が来たんですね・・・はぁ・・・はぁ」

ちょ息が荒いつて。なに考えてるの、このお姫様は。そろそろマジでヤバイな。仕方がないか・・・

俺は簡単な魔法を唱える。といつても無詠唱だから聞き取る事は不可能。

お姫様はいつのまにかスヤスヤと寝息を立てている。

俺が唱えたのは眠りの魔法。どんな魔法かというと・・・・・・わかるよね。

まあそんなこんなで俺の貞操もとい宝はまもられたのであった。

寝言でシャルルがシリウス様にまわりつくごみどもは私が消す。といっていたが気にしない気にしない。

今日、俺は結局部屋の隅にあるソファで寝ることにした。

はぁ結局夜ご飯たべてないな俺。明日からの学園生活大丈夫かなーなど色々な事を思いながらもいつの間にか俺もスヤスヤと寝息を

立っているのであつた。

くどきどきわくわくらんらんく (後書き)

はあゝ久々の更新。

なんていうかこの5日間は苦痛以外の何者でもなかった。でも神戸牛はおいしかったです。1キロも買ったんですよ。親戚との新年会的なものはなんとなく楽しかったですが、いとこの女の子に不覚にも萌えてしまった・・・OTL

まああんなこんなで今年もよろしくお願いします。

く学園生活1く

小鳥がピヨピヨと囀る音が響き渡る澄んだ空気がおいしい朝、俺は目覚めた。

「ん．．．もう朝か。」

そういえば昨日はベットがシャルルによって使えなくなったからソファァーで寝たんだっけ。

俺は普通の革張りのソファァーよりも少し柔らかい感触のソファァーから起き上がろうとした。

．．．あれ、おかしいぞ。体の上に何かが乗っているぞ。まあ最早言うまでもないけど一応言っておこうか。

「シャルル様。起きてください。」

そう俺の体の上には前と同様にシャルルが眠っている姿があった。

「ん．．．えへへ．．シリウス様の臭い．．．」

おい、絶対こいつ起きてるだろ。じゃないとベットからソファァーまでどうやって来たって言うんだ。

シャルルは毛布を挟む事無く、じかに俺の体の上に載っているわけ（ちなみに服はきてるよ）、俺の胸辺りでさっきからクンクンと臭いを嗅いでいる模様。少しこちよばゆい感じがする。

まあ臭いを嗅がれるのは誰だって嫌なわけで、俺はシャルルの耳元にまで顔を寄せてある言葉を囁く。

「今起きたら、デートして・・・」

その瞬間。

ガバッ。

「デートしてくれるの?」

やっぱり起きてたよこの子。

「いやデートしてあげようかな」と思ったんですがやっぱりやめです。」

まあ最後まで言っただけじゃないしね。

「うっっだまされた。シリウス様の嘘つき」

なんともおっしやいなさい。今日から学校生活が始まるってのにデートなんか行くわけないでしょ。

俺はソファァーから改めて起き上がり、先ほどから頬を膨らませている(可愛い)シャルルと一緒に寮内にある食堂に向かった。

「それにしても凄いですね。」

「本当に凄いですよね。私も最初に見たときはシリウス様と同じよ

うな気持ちでしたよ。」

Sクラス寮の食堂は凄かった。今年、俺を入れてSクラスは13人しか居ないっていうのにこの食堂は軽く見積もっても100人は入れるほどの広さに加えて、置かれている装飾品は見ただけでそれが価値のある物だとわかってしまうほどの品々である。

あれ、なんでだろう。Sクラスの食堂なのに俺とシャルル以外誰も居ないぞ。

俺は食堂の端から端までを見回す。

俺の様子に気づいたのかシャルルが話し出した。

「Sクラスは授業が自由参加なので、朝から起きている人は少ないんですよ。それに食堂を利用する人も少ないんですよ。みなさん自室に料理を運んで貰ったりするので。」

「なるほど、そういうことですか。」

それにしてもこんなに豪華な食堂を使わないって、どんだけ贅沢なやつらよ。

ってゆうか初めて知ったぞ、授業が自由参加とか先生涙目だろ。

少し苦笑いを浮かべる俺。

とりあえずシャルルに席に座ろうとって、一番端にある席に座る。料理はメイドさんが持ってきてくれるらしいので、そのまま席で待

機だ。

5分くらいしたらメイドさんが料理を運んできた。

まあなんと言うか一般的な朝食よりかなり豪華な朝食だが、味は不味くも無く格段に旨いってわけでもなかった。まあ普通においしかったけど。

朝食を食べ終わり横に座っているシャルルを見ると、まだ眠いのか目を擦っている。正直、メツチャ可愛い。つつい愛でたくなるが、ここは我慢だ。うん。

朝食も食べ終わりシャルルと一緒に席を立った所で食堂の入り口が開いた。

「おはようございます、シャルル姫。今日も見目麗しい姿、拝見できて至高の喜びでございます。」

なんだコイツ。もしかしてコイツもSクラスの人か。

食堂の扉を開けて入ってきたのは、なんていうかいかにもナルシストな奴だった。

肩まで伸びたストレートの金髪をなびかせながらシャルルの前にまで来てる。

顔は……微妙。まあ中の上って所かな。

とりあえずキザ男と呼ぶことにしよう。

キザ男は俺に気づくと鼻で笑って、

「まさか姫様、召し使いを雇ったんですか？」

と皮肉気味に言ってきた。

カッチーン。

さすがにいかに寛大な心を持っている俺と言えどこれには怒るっていやでも、ここで何か変な事をしたら色々な意味でやばいから、仕方無いここは自己紹介でもして仲良くしようではないか。俺ってなんていい奴なんだ。

「はじめまして。僕の名前はシリウス・マリスミティ。シリウスって呼んでください。あなたの名前は？」

うん、最高の自己紹介だな。キザ男を見ると、自分の皮肉が利かなかったことに若干目を見開いて驚いている。しかし、キザ男はこの程度では敗れないのと同じように自己紹介してきた。

「ふんっ。僕の名前はパーム・ネピア。呼ぶ時はパーム様と呼ぶように。わかったか召し使い君。」

ブチブチブチ。

やっぱダメッぽいわ。俺は今、怒りと言う名の覚せい剤に支配されてしまっている。

俺がこのキザ男改めパーム野郎をどうにかしようとした時、俺の隣でわなわなと震えているお姫様が口を開いた。

「ネピアさん。あなたは今、もっとも侮辱してはいけない人を侮辱してしまった。」

ちよ、ここでまさかのヤンデレ解放ですか？さすがにヤバイと思いますけど・・・っておい、目がうつろだぞー、しかもパームの奴何が起きてるかぜんぜんわかってないぞー

シャルルがああ呪文をつぶやく。

「流れ出る青き水よ その力を形に変えて 我に仇なす者を退けよ」

その後どうなったかは・・・まあ言わないでもわかるでしょ。

まあなんだかんだで今日から学園生活スタートだぜ！！！！

く学園生活く（後書き）

なんていうか………すみません。

眠い。眠すぎる。

終わり方がひどい、ひどすぎる。

ああ、ペイントボールを当てないで。作者は何処にも逃げないから。

く学園生活2く

現在俺は食堂での件を終えてシャルルとSクラスの教室に来ている。

最初に一つ言わせてくれ。

広っ！！！！

何が広いかって？それは・・・・この教室だよ。

なんなんだよ、俺が元居た世界の教室の3倍の広さはあるぞ。

しかもだ、こんなに広い教室なのに席に座っているのは俺とシャルルを除いてわずかに3名。

おかしくないか！？いくらSクラスが授業免除だとしても、13人の内、たった5名しか授業を受けないなんて。まあこっちの世界での授業を受ける受けないの概念は置いておいてだ。

俺がそんな事を思っていると、教室にいる3人が話しかけてきた。

ここで3人の容姿を述べておこう。

一人目

名前は当たり前だが知らん。

身長は165〜170センチくらい。

年は16、17位だろう。

髪は肩と腰の丁度真ん中位で特に縛ったりはしていない（ストレートヘア）。ちなみに髪の色は薄い赤だ。

瞳の色は赤でクリクリツとしていて小動物を思わせる。まあそこそこに美女って感じだな。訂正、正直言ってかなりの美女だが、俺はかなりのロリコンだったりするので興味なし。

二人目

名前は……このくだりはいらさないか。

身長は145〜150センチくらい。

年は13、14位だろう。

髪は長めで腰を越えて、膝辺りまである。こちらも一人目と同様に髪を縛ったりはしていない。ちなみに髪の色は濃い青。

瞳も青く、なんかクールビューティーって感じ。きつとツンデレってやつだな。顔はかなりの童顔なのに胸が何故がある。きつとBからCの間くらいだな。正直言って胸なんていらん。無ければ最高のロリっ子なのに……

3人目

名前は………。

身長は165〜170センチくらい。ちなみに言っておこう男だ。

年は同じ位かな。身長が少し小さいかな。ちなみに言っただけで俺の身長は175センチだ。

髪は薄い金色で襟足が長い。そして、かなりのイケメン。（イケメンなんて死ねばいいのに・・・）

爽やか系って言うのかな。王子様ってこんな感じ。って言われたら納得する容姿をしている。

とまあこんな感じの女子2人と男子1人だ。

その中で王子様（仮）が俺に話しかける。

「俺の名前はシルヴェス・リイルド。シルって呼んでくれ。お前の名前は？」

こいつ話し方が外見と合ってないぞ・・・

とりあえず俺も話を合わせる。

「・・・シリウス・マリスミティ。シリウスって呼んでくれればいい。」

始めに言っておくが俺は男と話すとき（自分より目下な奴に限っただが）、無愛想になる・・・なんて言うか男が言うのもなんだが

嫌いなんだよ、男が。俺は女の子が大好きなんだ。と言ってもシャルルが一番だけだな。（更に言っとヤンデレ状態じゃないシャルルが一番だ。）

とまあこんな感じで無愛想に返事を返した俺。シルは「無愛想だな」って言って苦笑いをした。

そして次に、クールロリな女の子が話しかけてきた。

「私の名前はリーザ。リーザ・セルドラントよ。」

「え・・・!？」

ちよつと待てよ・・・今確かにセルドラントって言ったよな。

「セルドラントって事は・・・姫様!？」

思わず口から出てしまった。

「そうよ。あなたの事は知っているわ。お姉さまに死ぬほど聞かされたから。」

姫様 リーザはシャルルのほうを見やる。

シャルルは俺の事をリーザに話していたことを知られて恥ずかしかったのか顔を赤くして俯ける。

知らなかった。まさかシャルルに妹が居たなんて。しかしおかしいよな。なんでシャルルは俺に妹が居る事を教えてくれなかったんだ？俺は気になってシャルルに耳打ちする。するとシャルルは

「だってシリウス様の事をリーザが好きになったら困るから・・・」
少し涙目で訴えて来た。しかしそんな事はないと思う。うん絶対に無い。だって俺、顔は悪くはないと思うけど何処にでも居るような顔だしなにより眼帯とか付けて雰囲気最悪な感じだからな。(シリウスはイケメンが嫌いなくせにシリウス自身がありえないほどのイケメンだったりする。さらに言うと、シリウスが付けている眼帯はシリウスのかっこよさをより一層際立てている。しかしながら本人は自分がありえないほどカッコイイ事に気付いていない。鈍感。b
y作者)

とりあえず、二人の紹介は終わった。そして最後に3人の中で一番大人っぽい女の人が自己紹介をしてきた。

「私の名前はミリア・サージェス。よろしく。」

ミリアさんは手を差し出してきた。俺は差し出された手を握る。世間一般に言う握手だ。

ミリアさんは握手した手を離す瞬間、俺にしか聞き取れないほど小さな声で

「シリウス君、授業が終わったら私に付き合ってくれないか？」

と言った。なんだろう?と思いつつも俺は頷いた。

自己紹介が終わったところで、チャイムが鳴った。

俺はとりあえず空いている席に座る。隣にはシャルルが座った。

ガラガラガラと教室の前のほうの扉が開かれる。

そこから入ってきたのは、少し目つきが怖く後ろで縛った長髪のポニーテールが印象的な女の先生だった。

その先生は教壇に上がるやいなや、大きな声で話し出した。

「よーす。私が今年一年このSクラスを受け持つ事になった担任のアイリスだ。お前らの事ビシバシ鍛えていくからそのつもりでな。」

ね……熱血教師だ。

「そうだ。明日、クラス対抗闘技大会があるから適当に2人参加者を決めさせて貰った。」

「……え!?!」

みんなハモってしまった。てゆうか嘘だろ。入学早々闘技大会なんて……バカだろうこの学校。

勉強しろよ勉強。

「えーちなみに参加者はシリウスとミリアだ。」

「ちょっと待ってください。」

当たり前だが俺は講義する。

「あーちなみに言うておくが、もしも不参加なんて事になったら色

々とやばい事になるから気をつけたほうがいいぞ。」

なんだよその言い方。メツチャ怖いじゃねえか。これじゃあ参加するしかないじゃないか。

「意義あり。」

ここでシャルルが声を上げた。

「なんでシリウス様が私以外の女と一緒になんですか？」

ええええええええええ。意義ってそこかよつ。せめてもうちょっと別の方向で抗議してほしいんだが。

「とにかく、参加はもう決まった事だから、抗議は一切受け入れない。わかったな。」

シャルルはぶーぶー言っていたが最終的にはわかったようだ。

そしてそつなく授業が終わり、俺は明日の打ち合わせと言うことでミリヤの部屋に行った。

「初対面で呼び出したりしてすまないな。シリウス君に少し聞いた事がある。」

真剣な眼差しでミリアが話し出す。

「なんですか？」

「シリウス君と先ほど握手したときに感じたんだが君の魔力は一体どうなっている？それと君の眼帯は見たところ何かの封印のようだが一体何のためにしている？」

「・・・・・・・・・・。」

「どうやら気付かれたらしい。しかし、まさかこの事に気づくとは、さすがにSクラスの生徒なだけあるな。だって俺が魔力を抑えるすべを完璧にマスターしているにもかかわらず、俺の魔力に気付いたのだから。しかも俺の眼帯がただの眼帯じゃない事にも気付いている。」

「さて・・・・・・・・・・どうやって誤魔化そうかな・・・・・・・・とりあえず言ってみるか。」

「僕は生まれつき体が病弱だったんです。しかも常人じゃ考えられないほどの魔力を持っていました。この眼帯がないと魔力が放出して病弱な体は耐えられません。なので僕はこの眼帯で力を抑えています。わかってもらえましたか？」

「適当に考えた話だが、合点はいく。」

「なるほどな。そういうことが、それならば理解できる。すまないな、無粋な事を聞いてしまった。話はここまでだ。明日に備えてシリウス君も部屋に戻って早く寝るといい。」

「ミリアさんがそう言ったので俺は「失礼しました」といってミリアさんの部屋を出て自室に戻った。」

部屋の扉を開けた時にシャルルが俺のベッドの上で

「はあ・・・はあ・・・ああ・・・シ・・・リウ・・・ス・・・様・・・の・・・臭・・・い・・・はあ・・・ああん・・・」

凄い事になっていた。

あわてて俺は、ベットに行きシャルルをシートから引き剥がす。

シートはシャルルの涎で凄い事になっている。

シャルルは俺が部屋に戻ってきた事に、今気づいたのか顔を真っ赤にして部屋を飛び出していった。

どうしよう・・・シート。

まあとりあえず明日は闘技大会だから、早く寝よう。

ベットはシートがヤバイので、またソファで寝た。

「明日どうしよう・・・」

疲れていたのかあつという間に俺は眠りについた。

く学園生活2く（後書き）

ねむ！！！！

最近思ってたんですが、作者は評価とかアクセスに振り回されてる気がします。

この小説は自己満足で書いているはずなのにいつの間にか評価が気になったりアクセスが気になったり・・・もう気にしない事にします。

多分そのほうがもったいいものが書けるような気がします・・・スイマセン、ちょっとかつこつけちゃいました。でも本当にそう思っています。

それでもこの駄作を読んで下さっている方々が居る事を心の底から嬉しく思っています。^^

なので作者の事は気にせずに読んでください。^^

長ったらしい話をスイマセン。これからも是非、今作を読んでいてください。

それではおやすみなさいです。

く学園生活く

体に違和感を感じて、俺は目覚めた。

体にかかっている毛布をはぐと、俺の胸辺りにスヤスヤと寝息を立てるシャルルの姿があった。

違和感とはもちろんこいつ（シャルル）のことである。

毎度の事ながら呆れてしまう。ってゆうかどうやって部屋に入ってるんだろ？俺は鍵をかけてるはずなんだが・・・まあそこらへんは深く考えないようにしよう。うん。

取り合えず壁に掛かっている時計を見る。時計の針は3時29分を指していた。

くうく

丁度時計の針が3時30分になった時、お腹が鳴った。

よくよく考えたら昨日は学校初日で午前授業だけだったんだ。しかも疲れていたから（精神的に）昼飯はもちろんのこと夕食も食べずに寝てしまったんだ。お腹が減っているのも頷けるな。

俺はシャルルを起こさないように体から引き剥がす・・・ってあれ？剥がれないぞコイツ。この小さな体の何処にこんな力があるんですか？このままでは空腹でやばそうなので仕方が無いからシャルルを起こす。

「シャルル様。起きてください。」

「……………起きない。更に言うと、顔を俺の胸にグリグリしてくる。すこしくすぐつたい……………っておい、こいつ（シャルル）絶対に起きてるだろ。毎回このパターンだからわかるって。でも可愛いな、この姿見てるととっても愛でたくなるよ。なんてったって今のシャルルの格好は白いヒラヒラのワンピース一枚だぜ。っておいおい、呑気に状況把握している場合じゃないだろ俺。そろそろ腹が減りすぎて気絶しちゃうよ俺。」

俺はシャルルを起こすために抱きしめた。

ぎゅうう。

「一見普通じゃない起こし方だが、まあこの子の場合は空寝だから案外効く筈だ。」

「あつ……………シ……………リ……………ウス……………様……………／／／」

案の定効いたみたいだ。

「やつぱり起きてたんですね。シャルル様。」

俺は少し荒んだ目でシャルルを見る。

するとシャルルは、

「だって、だってシリウス様は私の……………ごによごによ／／／」

なんか凄い事を言ってるみたいだが、気にしちゃ駄目だ。

会話をしているだけで腹が減ってくる。

・・・とりあえず何か食べよう。

俺は頬を真っ赤に染めているシャルルを尻目にソファから立ちあがって備え付けのキッチンに行き冷蔵庫を開けて中から前に試食した食材A（名前は知らん）と厚い肉を取り出す。ちなみに食材Aの味と形は俺が前にいた世界で言うところの、味がとうもろこしで形が人参みたいな感じだ。ついでに言うところの色は黄色。

俺はそのとうもろこしもどきと何の肉かは知らないけどとりあえず高そうな肉をフライパンで焼く。

ジュージュー。

なんかいいに臭いがしてきた。そろそろマジで限界なので火力魔法を使って一気に焼く。

ポワッ。

上手に焼けましたー。って感じになったので皿に移して早速一口はおぼる。

モグモグモグ。

う・・・・・・うめえええええええええええええええええ。

何て言うんだろう。このとおもろこしもどきの絶妙な焼き加減。お

腹が減つてるときっていつもの2倍くらいうまく感じるよね。

まあとりあえず腹ごしらえはしたんだが、今の時刻は4時ジャスト。まだ時間あるし……。もうちょっと寝ようかな。なんか眠りすぎたときって更に眠くなるよね。

なんだかんだでソファーに向かう俺。

「あつ……。シリウス様……。」

……。そういえばコイツ（シャルル）居たんだっけ。

「シリウス様、一緒に寝ましょうよ」

なんだろう、こんなに可愛い子に上目遣いされたらOKって言っしかないじゃないか。

「変な事しないならいいですよ。」

まあ、あれだ。俺も男って事なんですよ。それに好きな子にこんな事言われたら嬉しいじゃないか。

「わかったよ。早く早く」

最近思ったけど、シャルルって本当に18なのか……。世の中謎だ。俺はソファーに横になった。シャルルが毛布の中をゴソゴソと動いて、俺の上に乗ってきた。

そして先程と同じように俺の胸辺りに顔をグリグリしてくる。ホントに可愛いな。

俺はそんなシャルルの頭を撫でる。そして7時まで
あと
約3時間の眠りについた。

く学園生活3く（後書き）

．．．．．すいません。作者最近、仕事と学校が忙しくて書いている暇がありませんでした。

クラス対抗闘技大会編に次話から入ります。期待しないで待っていてくださいwww

それでは、しーゆー^^／

く学園生活4く

「・・・・・・・・・・様・・・・朝・すよ・・・・お・・・・・・・・ら・・・・・・・・
・よ」

ん？なんだろう？誰かが何かを言っている。

「ん・・・・・・・・・・」

「もうしリウス様ったら、仕方ないですね。」

チュ。

やわらかい何かが俺の唇に付いている気がするんだが・・・・目を
開けてみる。シャルルと目が合った。ってあれ？なんでシャルルの
顔がこんなに近くにあるんだ。

俺は眠っていた脳をフル回転させる。

・・・・・・・・・・キスされてるな、俺。

やっとの事で状況判断完了。って、おい。

ガバッ。

俺は上半身を起き上がらせる。その拍子にシャルルと繋がっていた
唇は離れる。

「なつ、何してるんですかつ、シャルル様っ。」

「7時を過ぎたのに起きないシリウス様が悪いんですよ。」

起きなかつたらキスされるとか・・・もう一回寝ようかな。って、何てこと考えてるんだ俺。

「あれ？今何時ですか？」

「8時です。」

シャルルは平然と呟く・・・って、8時！？

集合時間は7時30分。そして現在の時刻は8時。正確に言つと8時3分。

「・・・・・・・・・・遅刻だ。」

「・・・・・・・・・・そうですね。」

俺は速攻で制服に着替える。シャルルは大会参加者じゃないので余裕そうだ。

急がないともうクラス対抗闘技大会が始まってるかもしれない。

制服に着替え終わった俺はシャルルを部屋に残してクラス対抗闘技大会会場に急いだ。時間を止めて行く方法もあるが、どうせもう遅刻だと思ったから使わなかった。

そして走る事10分少々。会場に着いた。この時点で約45分の遅刻。なんかわいわいと歓声が聞こえるってことは大会はもう始まっちゃってるみたいだ。最悪なパターンだな。

正直かなり気まずい。何で遅れたの？ってミリアに言われたら何て言えばいいんだ？寝てた、なんて言ったらまず間違いない殺されるだろうな。

そんな事を考えながら東京ドームみたいな会場の周りを歩いてく選手控え室へと書かれた看板を見つけて入り口の扉を開けた。そして閉めた。

だって開けた瞬間にミリアさんがもの凄い目つきで睨んできたんだもん……。まあ、そうだったのも寝坊した自分のせいなので俺はもう一度扉を開けて中に入る。

「おはよう、シリウス君。良く眠れたかい？」ニコッ

・
なんだろう笑顔のはずなのに殺気が出ている気がするんですけど・

「おっ、おはようございます。遅れて本当に、本当にすいません。」

俺はミリアさんの想定外の口振りにもの凄い恐怖を抱き、地面に四肢をつけて頭を擦りけた。まあぶっちゃけ言っと土下座なんですけどね。

するとミリアさんは

「どうしたんだい。シリウス君。まだ幸いな事に試合は始まっていないからそんなに謝らなくても大丈夫だよ。まあもし試合に遅れてたら・・・ふふふ」

ダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラ

俺の全身から冷や汗がこみ上げてくる。何だろう。もしもあと少し遅れてたら俺はどうなってたんだろう。かなりの恐怖が全身を駆け巡る。

丁度そのとき女の人が部屋に入ってきて、

「SクラスとBクラスの参加者の方達は闘技場に来てください」

と言ってきた。そしてミリアさんは

「あつ、私達の出番のようだな。シリウス君行くぞ。」

そう言っつて、俺とミリアさんは控え室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0029j/>

最強って何？

2010年10月9日20時21分発行